

スウェーデン・フィンランド・台湾・韓国における「海外教育実習」の成果

Keyword: FT制度 CLIL英語で授業

Introduction 2011台湾 Analyses



2011年、11月
国立台中教育大学とその附属
小学校、私立薇閣小学校へ訪
問し、9日間の海外教育実習
を実施しました。

台湾の英語教育では小学校1
年生から英語専科とネイティブ
教員で教えています。

天王寺キャンパス、FT大学院
生と学部生11名の協同プロ
ジェクトです。
教える英語力の向上もめざし
て、半年の取り組みで、FT教
員が指導・引率しました。

研究の目当て

グローバル教員としての視点と体験

「グローバルティーはローカリティーとの相関(グローバルティー)の中でこそ意味を持つ。クラスルームで行う「授業」を深化させる中で「世界とのつながり」をもつことが可能である。「外からの目」を意識しつつ授業を繰り、「英語」を媒介語として外国の子どもと関わり省察を繰り返す体験は、「内なる目」の確立につながるであろう Stuart(2004)

「教える英語力」を

- 1) 明確なゴールの設定(海外の小学校で英語で授業をする Dörnyei (2001)
Increase your students' goal-orientedness
- 2) チームの中の中でのようにはたらくか社会的な学びの機会を提供
Provide students with some "social training" to learn how best to work in a team.
- 3) Usage-based Model(UBM)に基づく、手続き的知識(procedural knowledge)を蓄積する
チャンス。英語学習はexemplarの蓄積と反芻によって最も良く学ばれる Skehan(1998)

CLILにもとづく英語授業

CLIL(Content and Language Integrated Learning)

教科科目などの内容とことば(目標言語)を統合した学習を意味する。

アジアの子どもが英語で算数や理科を学ぶ、ノルウェイの中学生がドイツ語で紙芝居をする、日本の大学生がイタリア語で料理を学ぶ等は、このアプローチである 笹島(2011)
CLILアプローチは、言語学習では欠けてしまいがちになる学習者自身の意欲を引き出す可能性があり、学習者自身の発見と高い認知操作を促す

分析

- 1)事前・事後アンケート 2)ジャーナル分析(別紙)

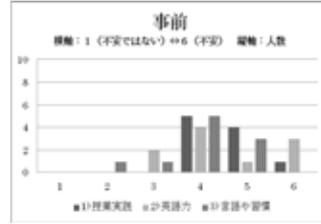


Figure 1

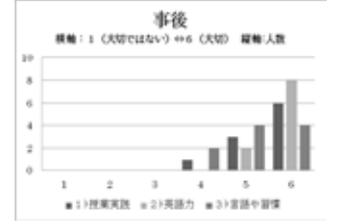


Figure 2

授業を通じての実感
英語力では、相手の思いを察知し、子どもに返す英語力が大切!「英語力」(z = 2.55, p < .01**)と「言語や習慣の理解力」(z = 2.98, p < .01**)には有意な差が見られ、「授業実践力」(z = 1.96, p > .05, n.s.)については僅かな差が見られた。
*下記スコアは個人情報のため特別に換算

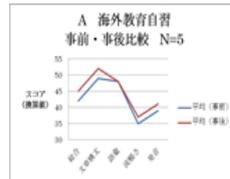


Figure 3

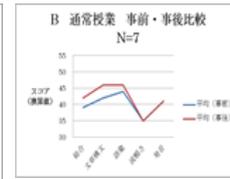


Figure 4

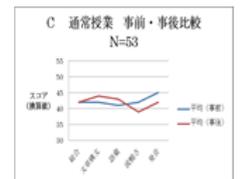


Figure 5

- 3)事前・事後Versant電話口頭試験

半年のあいだ、海外実習に向けて明確な目的で英語を使おうとし、英語力では、「構文」がのび、通常授業よりも「流暢性」「発音」で上昇がみられた。さらなる人数を対象として考察が必要である。

Conclusions

「海外教育実習の成果」

英語面
「おしえる英語力」向上への具体的ゴールを体感 アジアで互いに通じる発音の大切さ
音声から学ぶ「小学校外国語活動」の大切さ 口頭で話す英語への慣れ
授業でのティーチャートークを磨く経験
授業・グローバルマインド
CLILで日本の授業を海外でも発信できるおもしろさ 授業のぶれない軸を省察
似ていて違う隣の国へのおどろきと興味 アジアの先進的な教育改革から日本を見つ
め直す教師としての使命感

理科: 電磁石モーター



英語: 12支の動物たち



音楽: 日本の琴づくり



メンバー: (大学院) 森岡 硯 西川 大西 長田 (学部) 前田 吉川 徳富 野澤 島仲 草合